



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸狂歌の地方伝播：天明期の尾張を中心に
Author(s)	石川, 了
Citation	国語国文研究, 113, 11-22
Issue Date	1999-10-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94688
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_113_11-22.pdf



江戸狂歌の地方伝播

——天明期の尾張を中心に——

石川了

一、はじめに

上方文化とは異質な、江戸独自の文化が形成された十八世紀（政治でいえば、吉宗が八代將軍に就いて以後、松平定信が老中首座となるまで）は、江戸文芸においても極めて注目すべき時代だった。特に後半の宝暦・明和・安永・天明（一七五一〜一七八八）の約四十年間を中心に、江戸表では談義本や川柳、黄表紙といった新しい文学ジャンルが誕生し、また洒落本や咄本、狂詩、狂文などの分野においては、その後の流行の端緒ともいえるべき作品が次々に刊行されている。

江戸狂歌もこうした中から発生した。その草分け的存在だったのが幕臣の唐衣橘洲で、彼は早く宝暦十二年二十歳頃にすでに狂歌を詠む癖があったと、自ら述べている（後述『狂調弄花集』）。作品集でいえば、明和七年に橘洲の自宅に、四方赤人（後の四方赤良、幕

臣）、平秩東作（町人、蒿末（後の元木綱。町人）、秀安（後の蛙面房懸水。医師）、坡柳（素性不明）の計六人が集って行われた『明和十五番狂歌合』（写本）がその最初である。赤良が「おほよそ狂歌は時の興によりてこそよむなるを、ことがましくつどひをなしてよむしれものこそをこなれ。我もいざしれものゝ仲ま入せむ」（『狂調弄花集』）といって江戸狂歌の世界に足を踏み入れたのは、右狂歌合前年の明和六年のことだった。

続く安永期になると、江戸表における狂歌流行の機運は年を追うごとに高まっていく。まず橘洲・赤良とともに狂歌三大人と称せられた朱楽菅江（幕臣）が、安永初年（明和九年）頃に狂歌界に参加する。そして江戸狂歌の特色の一つともなる滑稽な狂名が、同二年とも三年ともいわれる、酒上熟寝（市谷左内坂の名主）主催の宝合せの戯会を機に市中に流行、さらに同六年に赤良を訪ねた俳人大島蓼太は、当時の赤良の評判を「高き名のひゞきは四方にわき出て赤ら／＼と子どもまでしる」と狂歌に詠んで贈った。また同八年に赤

良が主催した、高田馬場での五夜連続の観月会には、延べ七十人が参加して狂歌等の詩歌連俳を詠み、同九年中村座の『忠臣名残蔵』に出演していた五世市川団十郎（狂名、花道つらね）は、共演の初代尾上菊五郎の帰京を前にして毎日狂歌一首を披露した。

こうした状況下で、狂歌は「一座一興のいひ捨て」（『狂歌栗の下風』）という原則も崩れ始め、安永中には大根太木によって、歳旦という制限付きではあったが初めて印刷され（『奴風』）、同九年には書肆でもあった浜辺黒人が入花（出版費用としての投銀料。入銀とも）制度を利用して、応募歌から選歌して月ごとに一枚摺の形で板行するに至る。

かくして迎えた天明期に、橘洲編『狂歌若葉集』と赤良編『万載狂歌集』が同三年正月に刊行されるに及んで、江戸狂歌は爆発的流行を見せ、江戸市中に限らず地方にまで伝播していく。

二、天明狂歌刊本の国付け作者

天明期に純粹な狂歌集として江戸表で出版された諸作（写本や狂文、名鑑、一般的な狂歌絵本等はひとまず除く）を、国付けのある地方作者を併記しつつ列挙したものが次の一覧Aである（併記のない集はそういう記載がないことを意味し、傍線は列挙諸作中における、国付け地方作者としての初出を意味する。「」は推定）。

天明元年（安永十年）

ア、初笑不琢玉（浜辺黒人編、春跋刊）

同二年

イ、興歌めざし艸（丹青洞恭円編、正月刊）
ウ、狂歌栗の下風（浜辺黒人編、十一月序刊）
撰大坂1人

同三年

エ、狂歌若葉集（唐衣橘洲編、正月刊）
オ、万載狂歌集（四方赤良編、正月刊）
和州郡山1人（古人）・信州1人
カ、狂歌二葉艸（一風斎編、正月刊。但し本年二月跋）
紀州名高浦1人

キ、めでた百首夷歌（四方赤良詠、元旦序刊）

ク、狂歌猿の腰掛（浜辺黒人編、五月序刊）

ケ、網雑魚（奇々羅金鶏詠、七月跋刊）

コ、灯籠会集（四方赤良編、「本年七月」刊）

サ、落栗庵狂歌月並摺（元木網編、十一月刊）

同四年

シ、春興抄（元木網編、正月刊）

ス、狂歌すまひ草（普栗釣方・飯盛・繪盛方・頭光編、正月刊）

セ、狂歌続二葉艸（一風斎編、正月序刊）

ソ、閏月歳旦（武士八十氏・夕霧籬編、正月序刊）

タ、いたみ諸白（朱葉菅江編カ、七月刊）

チ、狂言鶯蛙集（朱葉菅江編、十二月序刊）

同五年

ツ、徳和歌後万載集（四方赤良編、正月刊）

尾張 3人 (其風 1首・楚泉 1首・傘衛守 1首)

美濃 神戸 3人・上毛 2人・下毛 栃木 1人・肥後 1人・播

州 三日月 1人

テ・狂歌あまの川 (飛塵馬蹄・古瀬勝雄編、七月刊)

尾陽 10人 (豊年雪丸 1首・本荒小萩 1首・酒井久女留 1

首・流石田舎 1首・池中嶋 1首・野崎寄波 1首・神

谷川住 1首・呼継浜近 1首・橘軒近 1首・山中住 1

首)

甲府 2人

ト・夷歌百鬼夜狂 (平秩東作編、冬序刊)

ナ・三十六人狂歌撰 (四方赤良編、「本年」刊)

同六年

ニ・狂歌新玉集 (四方赤良編、正月刊)

尾陽 (名古屋を含む) 3人 (市買連として和歌茂少々読

安 3首・同連三方長のし 2首・芦辺田鶴丸 1首)

下毛 (佐野と栃木) 2人・伊勢津 1人・上毛 高崎 1人

又・天明睦月 (朱楽菅江編、正月刊)

ネ・吾妻曲狂歌文庫 (宿屋飯盛編、正月刊)

ノ・狂歌太郎冠者 (一風斎編、正月序刊)

紀州 名高 1人

同七年

ハ・狂歌才蔵集 (四方赤良編、正月刊)

上毛 (高崎を含む) 9人・甲府 7人・下毛 (栃木を含む)

5人

尾州 (名古屋を含む) 3人 (芦辺田鶴丸 1首・豊年雪丸

1首・三方長のし 1首)

信州 更科 1人・美濃 大垣 1人・浪華 1人

ヒ・狂歌千里同風 (四方赤良編、正月序刊)

下毛 15人・上毛 9人

尾陽 8人 (扇折風 3首・三方長熨斗 2首・良村安世 2首・

和歌茂少々読安 1首・網引方 1首・柏二葉 1首・鍋

煮津丸 1首・八島かち時 1首)

浪花 2人・甲府 2人

フ・狂歌花のさかへ (朱楽菅江編、正月序刊)

ヘ・古今狂歌袋 (宿屋飯盛編、「本年」刊)

同八年

ホ・鸚鵡盃 (朱楽菅江編、正月序刊)

下毛 15人・上毛 (桐生を含む) 5人・濃州 平嶋 2人・武

州川越 2人・紀州 新宮 1人・総州 夷隅 1人・駿府 1人

マ・狂歌数寄屋風呂 (鹿都部真顔編、本年正月刊)

ミ・狂歌松のことの葉 (朱楽菅江編、「本年春」刊)

尾州 1人 (呉服安岐 1首)

ム・八重糸にむすび (朱楽菅江編、十月跋刊)

以上の刊本狂歌集三十三種を通覧するに、まず国付け作者が登場する時期については、ツの赤良第二総合撰集『徳和歌後万載集』からとみなしてよい。同書は空前の大ヒットとなったオの『万載狂歌集』(赤良の第一総合撰集)にその続編として予告されたため、「赤良がえらびに応ぜんとて、もてあつまれる草稿五くるまにあまり、

かつ千箱にみてり」(オの菅江跋)という状況となり、ついには予定の翌天明四年正月刊行が不可能となって、さらに一年を要することになった。こうした背景の一端が国付け地方作者という形で表面化したのである。そして最も強く影響を受けた地方は、国付け作者という視点から見る限り、尾張と上毛と下毛の三国がその中心だったといつてよい。中でも尾張の人々の反応は素早く、かつ最も積極的である。他の二国よりも遙かに江戸から遠い尾張が、なぜ機敏にしかも強く反応したのか、またその様相はどのようなものだったのか、次にその作者たちの検討を通して具体的に考えてみたい。

三、尾張天明作者の素性

一覧Aの傍線の作者各略伝について、不明者が多いのであるがまとめてみる。天明五年のツ『徳和歌後万載集』の三人のうちでは、傘衛守の素性が最も明瞭である。服部徳次郎氏の調査に詳しく、それによれば尾張藩士金森桂五(通称市之進)のことで、白鳥の材木奉行や御納戸役を歴任し、安永七年には父桂裏に従って江戸に赴いた経験を持つ。文化九年一月二十四日に六十五歳で没している(細野要斎の『諸家雑談』によれば自害という)から、天明五年は四十歳ということになる。名古屋の眺台門下の俳人で、師の死(寛政四年)後は同門の土朗に従った。となると残る二人のうちの其風(『狂譚弄花集』によれば永日庵真菅とも)も、安永九年二月に眺台門に入った俳人其風のことであるが、伝未詳である。残る楚泉は号からして俳人か上方狂歌作者と思われるが、全く不明である。

次に同年のテ『狂歌あまの川』(本書の性格については後述する)の十人については豊年雪丸を除き、本荒小萩が秋錦亭とも号した(『狂譚弄花集』)こと以外一切不明である。雪丸は『名古屋市史』人物編第二や富田新之助氏の報告によれば、通称を市橋助右衛門といい、安永二年に初めて尾張藩に仕えて勘定方並手代となり、勘定元締役や記録所書役等を歴任した。天明の初めに藩を辞して江戸に出(ただし名古屋市蓬左文庫蔵の尾張藩士名鑑『藩士名寄』)に見える履歴によれば、この時期に藩を辞した形跡はない、寛政中頃に名古屋本重町筋東(枕町)にもどり、狂歌の判者として当時城下第一と称されたという。月花庵、松月庵の別号の他、積素亭とも称し(『狂歌初日集』)、また滝本流の書に巧みだった。文政四年十二月十四日没、享年は不明である。

翌六年のニ『狂歌新玉集』(赤良を中心とする四方側の歳旦集)の三人の中では、芦辺田鶴丸が後世最も著名で、すでに森銃三氏や市橋鐸氏の論が備わる。それらによれば、名古屋呉服町の有松絞りの染物屋で、通称を近江屋伝兵衛、初号を春秋亭可蘭、また鶴雛人といひ、後に三蔵楼とも称した。文化末年に橘洲の息子の小島蕉園から橘の一字を授かって橘庵とも号した。四国から明石に渡る途中で遭難し、天保六年十月六日に七十七歳で没しているので、天明六年は二十八歳である。和歌茂少々説安は尾張掃苔録ともいうべき『芳躅集』の俳諧歌の部に、「和歌少々説安之墓」として見えており、「文政十一戊子四月廿八日(没)箕形善左衛門源政遠」とある。尾張藩士で、文化四年五月に隠居して惣領左源次が家督を相続している(『藩士名寄』)。残る三方長のしは伝未詳ながら、説安とともに「市

買（市谷）連」として入集していることに注意しておきたい。

翌七年のヒ『狂歌千里同風』（四方側の第二蔵目集）八人中の傍線六人の中では、扇折風の名が知られている。富田新之助氏の報告によれば、尾張藩納戸役を勤めて後に長岡炉裏御番という隠居役に転じたという。本姓天野氏、通称を梅之助といい、後に分九郎を襲名して天野家の八代目を継いだ。別号として要季丸、旭松亭、百合亭、居炉斎を称した。寛政元年春に江戸麹町の官舎に赤良、橘洲、菅江、木網、大屋裏住らを招き、帰雁の題で狂歌会を催して摺物にしたという。初めに触れた安永八年の五夜連続観月会の成果『月露草』が今日伝わるのも、折風が赤良から借りて寛政六年正月に写本を作らせた、その一本のみが現存するからである。また後年の文化元年には赤良から『扇折風六十賀』（『游戲三昧』所収）の一文を贈られ、最晩年の同九年春には、石川雅望（宿屋飯盛）の世話で蜀山人（赤良）より巴の一字を譲られて一巴亭を称した。翌十年十二月二十六日に六十九歳で没しているから、天明七年は二十六歳である。残る五人については知るところがない。

最後の翌八年のミ『狂歌松のことの葉』（菅江を中心とする朱楽連の蔵目集）の呉服安岐も、その伝未詳である。

以上、一覧Aの尾張作者二十八人中の傍線二十三人（残る五人は重出）のうち、いくらかでも素性の分かる人物はその四分の一ほどしかない。しかし傾向として藩士が目立つことと、晩台門下の俳人が天明狂歌に反応していることに留意しておきたい。

四、尾張天明作者の動向

ところで、右の尾張作者二十三人について、一覧Aでは地方作者であることを明確にするために、国付けがあるケースのみを取り上げたのであるが、その結果を基に改めて天明期の諸書を見直すと、二十三人の中の十六人は国付けなしで純粹な狂歌集刊本を含む他書にもその名が散見される（他書に見当たらない七人はツの其風・楚泉、テの野崎寄波・神谷川住・呼継浜近、ヒの八島かち時、ミの呉服安岐）。

便宜上ツの傘衛守のみを先に述べると、彼は早くウ『狂歌栗の下風』の天明二年二月分の「玄喚有^レ梅」「寄料理^レ恋」のところに各一首（後者では「ゑもり」と仮名書）が見えている。次いで狂歌作者名鑑の『狂歌知足振』（同三年四月序刊）のスキヤ連にその名が出、同『狂歌師細見』（同三年七月跋刊）では、「おち栗やちゑ」（元木網・智恵内子夫妻グループ）のところに「ゑもり」と出ている。この三書以外に衛守の名が見えないのは、恐らくは狂歌が俳人としての余技だったからであろう。十六人中の他の十五人は、他書にその名があってもすべて天明五年以後なので、書物ごとにとまとめたのが次の一覧Bである（アルファベットは追加書物で、波線はこの結果初出が早まったことを示し、二重傍線の五人は十五人以外の人物で後述）。

ツ・徳和歌後万載集（天明五年正月刊）

テ 豊年雪丸1首・二和歌茂少々読安3首・二三^{（一）}方長^{（二）}熨斗3

首・ヒ扇折風1首・ヒ良村安世1首・園蝴蝶1首・土師搔安1首

a. 細方夷歌連中双六 (赤良編、[同五年正月]刊)

「市」(市谷連)として、二三方長のし1首・ヒ扇折風1首・ヒ良村安世1首・ヒ鍋煮津丸1首・園蝴蝶1首、「川」(深川連)として土師搔安1首

b. 評歌俳優風(菅江・橘洲・赤良編、同五年秋開口刊)

「唐衣」側として、テ酒井久女留・テ池中嶋・テ橘軒近・テ山中住・水角奈志、「四方」側として土師搔安

c. 天明狂歌合(赤良判、同五年十月安世宅催、詠者十六人、写)

ヒ扇折風4首・ヒ良村安世5首・ヒ網引方5首・園蝴蝶5首

ト. 夷歌百鬼夜夜狂歌 (同五年冬序刊)

土師搔安8首

d. 下里巴人卷 (赤良編、同五年成、写)

七月会に紀安丸(歌欠)・園蝴蝶1首、八月会にヒ扇折風1首・ヒ良村安世1首・園蝴蝶1首、九月会にテ酒井久女類1首・テ流石田舎1首・テ池中嶋1首・テ橘軒近1首・テ山中住1首・ヒ扇折風1首・ヒ良村安世1首、十月会にヒ良村安世1首・ヒ網引方1首・園蝴蝶1首、十一月会にヒ扇折風1首・ヒ良村安世1首・ヒ網引方1首・園蝴蝶1首
ナ. 三十六人狂歌撰 ([同五年]刊)

園蝴蝶1首

e. 絵本吾妻袂 (橘洲序、天明六年正月刊)

テ豊年雪丸3首・テ本あらの小萩2首

f. 絵本八十字治川 (赤良序、同六年正月刊)

土師搔安1首

ニ. 狂歌新玉集 (同六年正月刊)

市買連として、ヒ扇折風3首・ヒ良村安世3首・ヒ網引方1首・ヒ柏二葉2首・ヒ鍋煮津丸1首、山手総連として園蝴蝶2首、深川連として土師搔安3首

ネ. 吾妻曲狂歌文庫 (宿屋飯盛編、同六年正月刊)

テ豊年雪丸1首・土師搔安1首

g. 絵本江戸爵 (菅江序、同六年正月序刊)

テ豊年雪丸1首

ノ. 狂歌太郎冠者 (同六年正月序刊)

紀ノ安丸5首

h. 絵本詞の花 (飯盛序、天明七年正月序刊)

ニ 芦辺田鶴丸1首・紀安丸1首・土師搔安2首

ハ. 狂歌才蔵集 (同七年正月刊)

ニ和歌茂少々読安1首・ヒ扇折風2首・ヒ良村安世2首・ヒ網引方1首・半掃庵也有1首・園蝴蝶4首・土師搔安3首

ヒ. 狂歌千里同風 (同七年正月序刊)

紀安丸1首・園蝴蝶2首・土師搔安2首

i. 三囲奉納狂歌額 (菅江撰、同七年二月奉納、写)

土師搔安1首

ヘ. 古今狂歌袋 (宿屋飯盛編、[同七年]刊)

テ豊年雪丸1首・半掃庵也有1首・土師搔安1首

j. 画本虫撰（飯盛序、天明八年正月刊）

土師搔安1首

ホ・鸚鵡盃（同年正月序刊）

深川連として土師搔安3首

この一覽Bに先の一覽Aを重ね合わせる（便宜上二重傍線の人物も加える）と、天明五年以後の、すなわち同三年の『万載狂歌集』の大ヒットに尾張作者がどのように反応していたか、その動向が鮮明となる。

天明五年から順次見ていく。正月に出た『徳和歌後万載集』に入った尾張作者は、実は国付けのある其風・楚泉・衛守の三人だけではなかった。これに雪丸・読安・長熨斗・折風・安世・蝴蝶・搔安の七人を加えた十人十四首を数える。後に尾張で中心的存在となる雪丸と折風の刊本初登場も本書だった。また彼らのうちの長熨斗・折風・安世・蝴蝶の四人と、国付けでは二年後にその名が出る煮津丸の五人は、そろって市谷連に属していることが、筆綾丸こと歌麿画くaの狂歌双六によって分かる。ともに赤良の編であるから、刊行準備中の前年には彼らも赤良人気にあやかっていたと思われる。七月になると、後述するように橘洲一派の事実上の旗揚げともなる『狂歌あまの川』が刊行され、雪丸以外は新顔らしい十人がこれに入集する。そしてこのうちの久女留・中嶋・軒近・中住の四人と、二重傍線の角奈志（『狂調弄花集』によれば尾張作者）の五人が、狂歌作者の評判記である『狂歌俳優風』で『唐衣』側と明記される。一方先の人々はやはり赤良寄りで、特に安世は十月に赤良を判者に招

いて自邸でc『天明狂歌合』を催し、これに折風・蝴蝶、国付けでは二年後に出てくる引方の三人が参加している。赤良も安世に対しては年次不明ながら、『百番月歌合序』（『天明八年春』刊）『四方のあか』所収）を贈っており、『尾張のみくにのすき人ら、もゝちの歌をよみたるに、良村安世ひとりしてもゝちの歌をよみあはせしは、かの良峰安世朝臣の水車よりよくまはりたる口車』などと記している。ともかくもこの頃、尾張作者の中にも赤良寄りと橘洲寄りの二つのグループがあったようだが、当時の各連・側がそうだったように互いに対立するようなものではなく、赤良の七月から十一月の月並会の成果であるd『下里巴人巻』に、橘洲寄りの久女類・田舎・中嶋・軒近・中住らも参加している。

翌六年正月、赤良は急増した門人対策として歳旦集『狂歌新玉集』を刊行するが、これも国付けのある読安・長熨斗・田鶴丸の三人だけではなく、折風・安世・引方・煮津丸と、国付けでは翌年に出てくる二葉の五人が加わって八人十九首が収まる。所属連不記載の田鶴丸以外は七人すべてが市谷連となっており、これに前年の双六の中で重複しない蝴蝶を加えれば、合計八人が市谷連所属ということになる。なお田鶴丸は本書が刊本初登場である。本年からいわゆる狂歌絵本が出版されはじめるが、雪丸の入集が目立ち、それも橘洲序のe『絵本吾婦袂』には、この種としては多い三首が入る。また前年の画像狂歌集『三十六人狂歌撰』の流れを汲みつつ、豪華本に一変した『吾妻曲狂歌文庫』（北尾政演こと山東京伝画）にも雪丸は入っている。

翌七年正月の赤良第三総合撰集『狂歌才蔵集』も、国付けのある

田鶴丸・雪丸・長髪斗だけでなく、読安・折風・安世・引方・胡蝶・搔安、それに二重傍線のかの横井也有が加わって計十八十七首が入集する。也有が本書と、前年の『吾妻曲狂歌文庫』の続編ともいえる『古今狂歌袋』に入集しているのは、『鶉衣』前編が赤良の世話で本年刊行されることと関係があるろう。赤良編の最後の狂歌集となる第二歳旦集『狂歌千里同風』では、国付けのある折風・長髪斗・安世・読安・引方・二葉・煮津丸・かち時の八人に、二重傍線の安丸・胡蝶・搔安が加わり、十一人十七首が入集する。

翌八年は前年六月に松平定信が老中主座となつて寛政改革が始まり、これを機に赤良が狂歌界と絶縁したため、目立つた動きがない。以上から尾張作者の参入過程のみをまとめれば、その実態は決して一覽Aのような状況ではなかったことが分かる。すなわち天明五年にはほぼ参入しつくしており、六年に田鶴丸と二葉が、七年にかち時と故人の也有(天明三年六月没)が、そして八年に安岐が加わったことになり、同五年に集中していたことが知られる。

五、埋れていた尾張天明作者

ここで二重傍線の残る紀安丸(保丸・安麿)・園蝴蝶(胡蝶)・土師搔安の三人と、一覽ABにも登場しない紀まゝ成(儘成)に触れておく。若き日の本居内遠が右馬耳風(二世)の狂名で編んだ狂歌集に、古今の尾張関係者のみを収める『狂調弄花集』(文化十四年刊。私家版)がある。これに右四人ともに見えている。安丸は同書画者の一人である松寿園有文のことで、別号を白観堂また律庵といい、

初名「安丸」とある。ならば『芳躅集』に「紀有文之墓」として出ている寺沢九左衛門のことで、文化十四年八月十三日に没している(享年不明)。尾張藩士で、明和九年三月の勘定奉行当分支配を最初として、熱田奉行預地方手代、御国方勘定役、清須と太田の各代官手代等を勤めている(『藩士名寄』)。蝴蝶は文化期成立の『蜀山人自筆文書』の中の狂歌作者一覽に、「園故蝶 芳春園、尾州外山やしき、津田四郎左衛門」とあり、尾張藩士と分かる。文化末には故人となっている(『江戸方角分』)ことを条件に『藩士名寄』に当たれば、文化三年九月十八日に病死した津田弁吉のことで、寛延三年十二月に新規御目見となり、御書院番、御側足輕頭、御供番本役、淑姫御附歩行頭等を歴任している。搔安は『狂調弄花集』の菊泉亭里童のところに、「後江戸住、土師搔安」とある。天明五年十月十四日に催された著名な百物語狂歌会の会場、江戸深川梶倉河岸の別荘の主はこの搔安で、『夷歌百鬼夜狂』(一覽ABのト)がその成果である。右の狂歌作者一覽に「土師搔安 深川ウミガワ、榎本次右衛門」(『江戸方角分』では治右衛門)とあり、『藩士名寄』には見えないから町人であろう。天明八年五月に七十余歳で没したという(『狂歌人名辞書』)。前号の里童では、明和三年春の晚台編『太郎集』(三ツ物集)や、晚台が同年八月に筆を執った熱田神宮奉納額(『松濤棹筆』巻七による)などにその名が出る。傘衛守や其風同様、搔安もまた晚台門下の俳人だったのである。晚台の門人がなぜ天明狂歌に参加していたのかは判然としないが、晚台自身が尾張藩士であったことや、安永四年に江戸の蓼太の許に滞在し、天明二年春も江戸にいたことなどが関係しているのかもしれない。四人のうちの残るまゝ成は『蜀

山人判取帳」に、「きのまゝなり」の注として赤良自身が「高部久右衛門、住洲崎」と記している^{〔注〕}。身分等は不明である。

天明期におけるこの四人の動向について、天明四年まで（同五年以後は一覧Bの結果に同じ）を以下にまとめてみる。最も早くから活動しているのは安丸で、ウ『狂歌栗の下風』の天明元年正月分から翌年の正月分の間に、七回にわたって計十五首が見えている。衛守よりさらに一年早いことになる。同三年では同じ黒人編のク『狂歌猿の腰掛』に一首見え、当代一流の作者が集った戯会成果の『狂文宝合』（万象亭編、七月刊）には、「志奈玉」なる珍品家宝の狂文が収まる。また吉原を舞台にした小冊の『灯籠会集』と、十一月の雑司ヶ谷お会式当日の、赤良と親しい人々の小会成果『狂歌投やり花合』（赤良編『栗花集』所収、写）にも各一首が入る。翌四年では正月刊の赤良母六十賀集^{〔註文老葉子〕}に一首、珍しい狂歌歳旦黄表紙の^{〔栗の根〕}（伯楽側中心）と『金平子供遊』（小石川連中心）にも、それぞれ一首と三首入集する。また木網編のシ『春興抄』に三首（別に「牛天神下」の所付けのある気野家寿丸なる人物も二首見えているが、ひとまず別人とみなしておく）、大がかりな角力合の『ス』『狂歌すまひ草』に一首、大門喜和成の追悼集であるタ『いたみ諸白』に三首が見える。翌五年以後も活動が続き、尾張天明狂歌作者の草分け的存在といつてよい。赤良の四方側寄りの入集が目立つ。

蝴蝶は天明三年の名鑑『狂歌知足振』のスキヤ連に、「その、小蝶」とあるのが管見初出で、同年の『狂歌師細見』では「落栗屋全蔵」（木網グループ）のところに出来る。名鑑に載るほどののに、なぜか天明四年までは詠が見当たらず、むしろ同五年以後に四方連の一員と

しての活動が目立つ。

搔安は右二人より遅れて天明四年が管見初出で、狂歌歳旦黄表紙の^{〔前編〕}『大木の生限』（本町連中心）と前出の^{〔後編〕}『栗の根』に各一首、スの『狂歌すまひ草』に六首、タの『いたみ諸白』に一首、菅江を頭目とする朱菜連の最初の集であるチ『狂言鶯蛙集』に二首が見える。彼の本領は一覧Bにもはっきり出ていて、尾張天明狂歌作者のまさに雄である。住所にちなんだ深川連に属しているが、赤良や菅江と極めて近かった。

残るまゝ成は、五世団十郎が代々を含めて初めて『仮名手本忠臣蔵』の大星由良之助を演じた、その慶賀の作『皆三舛扮戯大星』（「天明三年夏」刊）に一首見えるのが初出で、翌四年に安丸と搔安も入った、前出の^{〔後編〕}『栗の根』とス『狂歌すまひ草』にそれぞれ一首と五首、そしてチ『狂言鶯蛙集』に一首入集して以後、全くその活動が見当たらない。あるいは没したのかもしれない。

尾張天明狂歌作者は、右四人に衛守を加えた五人がいわば先発組で、其風と楚泉を含む雪丸以下の前述の人々は、国付け表記とは無関係にその実際は後発組だったことになる。

六、尾張作者の拠点と橘洲一派の成立

ところで、先発組の安丸・蝴蝶・衛守、後発組の雪丸・読安・折風の六人はすべて尾張藩士だった。このうちの蝴蝶・読安・折風と、素性のはっきりしない長熨斗・安世・引方・煮津丸・二葉を加えた八人は市谷連に属する（一覧A Bの二と同Bのa参照。なお蝴蝶だ

けは山手総連にも属する。搔安と田鶴丸を町人ということで別けると、尾張作者の主要人物を中心とする右十一人のうち、なぜ八人までが市谷連なのかといえば、尾張藩の江戸藩邸があったからである。その上屋敷は市谷御門外（現、外堀を挟んで市谷駅西側の自衛隊市谷駐屯地付近）、中屋敷は四谷御門麹町現、四谷駅南筋向いの麹町六丁目及び上智大学付近）、下屋敷は大久保外山（現、学習院女子大南側で、新宿区戸山二丁目戸山ハイッ付近）にあった。特に藩主が住む上屋敷には、定詰藩士だけでなく江戸勤番侍やその関係者も多かったに違いない。ここからは赤良の住む牛込中御徒町（現、神楽坂西方の新宿区中町）まで徒歩十五分もあれば充分で、橘洲の住む四谷忍原横町（現、地下鉄四谷三丁目駅付近及びその南側）へも同二十分ほどである。連の名がなぜ市谷なのかを考えた時、この江戸藩邸上屋敷こそがその象徴であったかと気づく。この上屋敷が尾張狂歌作者たちの、天明狂歌享受の取り入れ口であったに相違ない。してみれば市谷連の素性不明人物も大方は尾張藩士かその関係者とおぼしく、そうだとしたら彼らに付される国付け表記の意味は、江戸勤番を終えて帰国中ということであつたろう。考えてみれば、何の手づるもなくいきなり尾張から投合できるはずもなく、江戸ですでに知己になつてゐるか、誰かの紹介が必要だつたはずである。たとえば写本『酔竹集』（天理図書館蔵）には、橘洲と雪丸が連名で篠玉涌（名古屋旧家の町人）を「雅会御連中」に紹介する、天明七年正月付け請状が書写されているが、そこには「宗旨之儀ハ古今夷曲集^二而 曉月坊末流に^三絶無御座候。御法度之落首体^二而ハ無御座候」などとあつて、実に厳格である。江戸での活動経験を持つ

尾張作者たちは、江戸表であらうと国元であらうと、天明狂歌の流布に欠かせない大切な役割を担つていたのである。こうした意味からすれば、市谷上屋敷はまさに尾張作者たちの原点であり、最大のもよりどころだつたといえよう。なおついでに右の玉涌に触れておくと、彼には天明六年からの家集『玉はき』がある（『狂歌僻目利』）というが、天明期狂歌資料中に玉涌の名は見当たらない。

いま一つここで述べておきたいのは、橘洲一派の成立と尾張作者との関わりについてである。一覽Aの『狂歌あまの川』（天明五年七月刊）は、古瀬勝雄の序に「ことし文月七日、短冊竹のよそ人をまじへず、星にもかさぬ唐衣、うらなくかたらふ人々、先生のもとにつどひて、七夕を題にてよめるを一冊となし」とあつて、七十二人の詠を各一首を取める。当然彼らは橘洲親派であるはずで、この中に尾張作者も雪丸ら十人いることは前述した。開口部分に同年秋とある一覽Bのb『狂歌俳優風』は、橘洲一派を明示する「橘洲連」（『唐衣』とも）の語の初出で、橘洲・菅江・赤良の狂歌三大人が立ち合つて位付けをして、脱稿したのは八月十二日だつたと本文末に見えている。橘洲にとつては右七夕会の一ヶ月後のことである。四方連八十四人に対して朱楽連・橘洲連ともに三十一人は妥当な線で、橘洲連のうちの二十七人を『狂歌あまの川』の入集者が占める。一書全体の傾向として新顔を取り立てる方向だつたらしく、橘洲としても『狂歌若葉集』以来の親派だつた紀勉・大泥はね道を取り上げておらず（右七夕会には参加している）、尾張作者ではその後も活動する雪丸の名が見えない。橘洲が自派として評判記に取り上げた尾張作者五人（一覽B参照）は、翌六年以後は橘洲自身が狂歌集を出

していないせいもあつてか、これといった活動を見せない。ところが『狂詞弄花集』冒頭の寛政九年五月付けの橘洲の一文（本来は玉涌所蔵の雅帖の序で、その転載）に、「尾陽はすべて予が門葉のみにして、他の指揮をうけざるは、まさに雪丸・田鶴丸・玉涌・金成・桃吉・有文の諸秀才、よく衆をいざなふ故なるべし」とある。雪丸以下はいわゆる尾張酔竹連（酔竹は橘洲の別号）の重鎮たちであるが、その尾張酔竹連の源流を天明期にまで遡った時、事実上は雪丸一人だったことが分かる。田鶴丸は未だその兆しを見せていないし、玉涌は前述のごとくで、金成（玉涌息子）・桃吉（尾張藩士）は姿さえ現していない。有文こと安丸は折風ほどではないにしろ赤良寄りであるが、活動時期が早くて長いため、末尾にその名があがったのであろう。「予が門葉のみ」の一言は、折風や安世からすればいささか誇張に聞こえようが、橘洲一派となる玉涌個人の雅帖の序ならば責められまい。雪丸・桃吉・安丸が尾張藩士だったことを考えれば、尾張酔竹連の成立と展開にも市谷藩邸が少なからず寄与していたと思われる。

七、おわりに

以上、江戸狂歌の地方伝播を天明期の尾張を例として述べてみた。江戸の文化はもちろん江戸で誕生、成長するのだが、それは江戸のみにとどまらず、遅かれ早かれ地方にも伝播する。その好例が江戸戯作趣味にあふれた天明狂歌で、特に尾張の場合、これが様々な方面での基盤になっていると筆者は考えている。独自の文学観と文体

を持つ也有の『鶉衣』が広まったのも、狂文の第一人者でもあった赤良の目に留まって江戸で出版されたからこそであつて、これが地元尾張や上方だったらどうであつたろう。化政期を中心として寛政半ばから天保にかけての、洒落本を中心とする名古屋戯作の作者層にも狂歌壇の背景があつたし（藩士だった石井足穂や花山亭笑馬などはその典型）、曲亭馬琴と田鶴丸の交流もまたよく知られている。さらには前述の若き本居内達も書肆万巻堂の主として狂歌・戯作に遊び、田鶴丸の狂歌門下で後に二世柳亭種彦となる笠亭仙果の江戸転居も、その目的は狂歌判者として身を立てることだった。出版界においても、文屋古文で狂歌活動をした、かの東壁堂永楽屋東四郎の提携江戸書肆は、前掲一覧A Bの過半を出版した蔦唐丸こと蔦屋重三郎であつた。江戸と尾張を結んだ天明狂歌の意義は単に狂歌にとどまらないことを、改めて認識する必要があるだろう。

注1 十八世紀の江戸文化を多角的に論じた好著に、中野三敏氏

編『文学と美術の成熟』（『日本の近世』第十五巻、中央公論社、平成5）があり、岩波講座『日本文学史 第九巻 一八世紀の文学』（平成8）も示唆に富む。

注2 日野龍夫氏編・解説『五世市川団十郎集』（ゆまに書房、昭和50）

注3 江戸狂歌の印刷に関しては、幕臣だった木室卯雲の家集『今日歌集』が安永五年に刊行されているが、彼は橘洲や赤良たちよりも一世代前の存在で、同書出版を機に赤良たちに接近していった。したがっていわゆる天明狂歌の熟成を遡る時、

注4 同書の刊行を同一線上で論じることではできない。
この一枚摺二十二回分（安永九年正月から天明二年夏の分まで）を集めて一書にしたものが、一覧A（本文後出）のウの黒人編『狂歌栗の下風』で、詳しくは拙稿「浜辺黒人による江戸狂歌の出版―天明一、二年前後を中心に―」（『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』平成10・3）参照。なお同稿の中で、唯一確認できた国会本に編集の漏れがある可能性を指摘しておいたが、九州大学古典籍調査委員会（代表・九州大学教授松原孝俊氏）の一員としてソウル大学所蔵古典籍を調査された久保田啓一氏から、同大学にも一本があつて国会本と全く同じところが欠けているとのこと教示を得た。どうやら編集の漏れではなく、基にすべき当初の一枚摺そのものが、応募歌不足等何らかの理由で板行されなかったようである。

注5 『暮雨巷晚台の門人』（愛知学院国語研究会、昭和47）第一章「7桂五」。

注6 伊藤東吉氏『晚台の研究』（清水孝孝・野田千平両氏編、藤園堂書店、昭和51）所収「晚台年譜」参照。

注7 「尾張狂歌人墓（一）豊年雪丸」（『掃苔』昭和14・6）。

注8 森銃三氏「芦辺田鶴丸」（『森銃三著作集』第四卷、中央公論社、昭和46）、市橋鐸氏「芦辺の田鶴丸・同補遺」（同氏『東海郷土文化史考』、愛知県郷土資料刊行会、同50）。

注9 「尾張狂歌人墓（二）一巴亭の号を継いだ扇折風」（『掃苔』昭和14・10）

注10 五人のうちの柏二葉については、橘洲の息子の小島蕉園も二葉を称している（『江戸方角分』）ので、あるいは同人かとも思うが確証がない。

注11 刊本にこの連の名は欠けているが、野崎左文によってスキヤ連と書きこまれて以来、そうみなされてきた。しかし小林ふみ子氏「鹿都部真顔と教寄屋連」（『国語と国文学』平成11・8）によって、その実際は落栗庵一門と一体化化していることが指摘されている。

注12 キノマナリとも読めそうな生儘成なる作者が『狂言鶯蛙集』『徳和歌後万載集』等に見えるが、『狂歌知足振』（天明三年）の本丁連に「生れのまゝ成」、「金平子供遊」（同四年）に「う まれのまゝなり」の振り仮名があるので別人であろう。

注13 尾張文人たちの狂歌活動を知るに有益なので、『大妻女子大学紀要―文系―』28、29号（平成8、9・各3）に翻刻し、『芸能文化史』14号（平成8・12）に解題を載せておいた。

注14 同書には、姓名等の注記はないが三方長熨斗の名も見えている。二人とも赤良寄りだったことを示していよう。

注15 拙稿「名古屋洒落本作者とその周辺」（『国語と国文学』平成元・11）参照。

注16 鈴木俊幸氏『蔦屋重三郎』（若草書房、平成11）参照。
（いしかわりよう・大妻女子大学教授）